
アタイはバカじゃないもん！

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アタイはバカじゃないもん！

【Nコード】

N5510P

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

幻想郷でもトップのお馬鹿さん、チルノ。でも彼女は天才と言いつ張っている。だって自分は天才なんだからと意地を張っているのだから。

（前書き）

前書き

こんにちは。突発的に短編書きとなったので書いてみました。

チルノでシリアス。でも案外できるかなと判断してやってみました。
だ。

出来が悪いのは仕様です。ではどぞ。

ここは湖。幻想郷の湖。ご存知氷の妖精さんの住处。

そして今日もまた、氷の妖精さんは弾幕ごっこにいそしんでいました。

『SPELL BREAK!!』

弾幕ごっこではお馴染み、誰かが勝ち、誰かが敗北した瞬間がわかる言葉。

勝ったのは普通（笑）の魔法使い。負けたのは氷の妖精さんのご様子。

「ちきしょー！！また負けたー！！魔理沙！！もう一度よ！！」

へこたれても、立ち上がって人を指差すぐらいのプライドと根性は残っている妖精さん。

しかし、対戦相手の魔法使いは欠伸するぐらいのやる気のなさである。

「えゝ？またやるのかよゝ？ぶっちゃけもうやる気ないんだけどさゝ？」

「うつさい！！このままじゃアタイのプライドが傷ついたままなの！！」

「いいから勝負しなさい！！」

「へいへい、こりや何言っても無駄かゝ」

「それじゃ、消し飛ばさない程度にもう一回やるか」

ミ三八卦炉を構えなおし、妖精さんの再戦の申し込みを受諾する。

妖精さんも自身の能力で氷を身にまとい、戦闘態勢に入る。

そして始まる、二回目の弾幕勝負。

「今度こそアタイの勝利よ！！」

「悪いが、連勝させてもらっぜ！！」

およそ五分後、静かになった湖に、緑色の髪をさせた妖精さんが通りかかりました。

「ふっふふんふっふっふん」

適当な鼻歌を口ずさんで歩いていると、

湖にこんがり真っ黒になって倒れている妖精さんを見つけた模様。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とても気になったその妖精さんは、

とりあえずその辺にあった木の枝で、その妖精さんの体をツンツンと突付けました。

しかし、倒れている妖精さんはまったくアクションを取らない。
取ってくれない。

これだけじゃ足りない判断したのか、今度は声をかけました。

「チルノちゃん？起きて〜、チルノちゃん」

声をかけると、倒れている妖精さんは閉じていた眼を開けました。

「あ、起きたみたいだね、チルノちゃん」

安心した様子を見せる起こそうとした妖精さん。

一方、起きた方の妖精さんは、体をぐあつと上げて、辺りをきよろきよろと見渡しました。

「あれ？あれ？あれ？魔理沙はどこ！？」

どうやら、さつきまで戦っていた人を探している様子。

しかし、周囲にそれらしい者はまったく見当たらない。人影もない。起こした妖精さんは、親切心で起きた妖精さんを諭そうとしました。

「チルノちゃん……多分だけど、チルノちゃん負けたんだよ

それで、魔理沙さんは帰っちゃったんじゃないの？」

「何い！？アタイは負けてないわよ！！ちょっと気絶しちゃっただけよ！！」

「いや、それが負けなん『おのれ魔理沙く！！逃げるなんて卑怯な奴ね！！』」

起こした妖精さんの言葉も耳に入らない様子。

こんな妖精さんが相手では、会話しても無駄だと呆れてため息をつくしかない。

若干頭を抱えて「どうしよう」と悩んでいると、

懲りない妖精が思い悩む妖精に意見を求めてきました。

「大ちゃん!!どうしてアタイはあいつに勝てないの!?!
何かわからない!?!教えてよ!?!」

大妖精の肩を持って、ゆっさゆっさと揺さぶり意見を求めるチルノ。

大妖精は「え〜っと」と考え続ける。

その間ず〜~~~~と、チルノは大妖精を揺さぶり続けた。

こんな状況下でも、大妖精は冷静な答えを出しました。

「多分だけど.....チルノちゃんが、『バカ』だからじゃないかな?」

「ば、バカだから?」

その瞬間に、チルノの脳内では「バカ」と言う単語が幾つも浮かんで消えていった。

自分がバカだから魔理沙に勝てない?ではバカじゃなくなったら魔理沙に勝てる?

思い立つたらずぐ行動に移すのが彼女の思考らしい。

「大ちゃん！！今から紅魔館で勉強してくる！！」

「な、なんだつてええええ！！？」

予想外すぎるチルノの発言に、当然驚く大妖精。

「せっかくだから、大ちゃんもついてきて！！」

「ちょ！？チルノちゃあああん・・・・・・・・・・」

大妖精の腕を掴み、半ば強引にチルノは大妖精と一緒に、

大図書館のある紅魔館へと向かっていった

「で、ここで本を読ませて欲しいと？」

「そうよ！！頭がよくなる本！！」

紅魔館の大図書館が主、パチュリー・ノーレッジは、珍しい来客の予想外な注文にも、

まったく動じず、超冷静に対応していた。

ちなみに門番はただ今居眠りぶっこいたお仕置きを受けているが、関係ない話である。

「なるほどねえ、バカを治せば魔理沙に勝てると思ったわけ？」

「そうよ！……てかアタイはバカじゃないわよ！！
でも賢くなつた方が強くなると思ったのよ！！」

どうやら未だに自分のバカさを認めていない様子にパチュリーは呆れたが、

魔理沙と違って純粋に本を読みに来た者を無下に扱うのは悪いと思
い、

一応それらしいものを紹介してきた。

「それじゃ、まずはこういうの読んでみたらどう？」

「おおー……中々分厚いじゃない……」

パチュリーが手渡したのは、今時のラノベぐらいの厚さと大きさし
かない本。

それでも、チルノにとっては十二分に分厚い物に見えたらしい。

「よし……勉強して、魔理沙に勝ってやる……」

そして読み始めるチルノ。

小さいと言っても、それなりに内容が詰まっている本。

読んで五分も経たないうちに、チルノの体は溶けそうになっていた。

「ほ、ほえ？え、えーつとお……相手の動きの先のー
ー……」

今にも消えてなくなりそうなチルノを、パチュリーはにやにやしな
がら観察していた。

そんなパチュリーの顔が映った瞬間に、彼女は「は！！」となり、

我と自分の形を取り戻して、再び読解に入っていた。

その様子を後ろから見ていた大妖精だが、どうやら暇になってきた
らしく、

そわそわとしながら、パチュリーに尋ねてきた。

「あのー、私も何か読ませてもらってもよろしいでしょうか？」

「別にいいわよ、適当にその辺から読みなさい」

「では、お言葉に甘えて」

大妖精がその辺から適当に取ったのは、参考書レベルの大きさと分
厚さを誇る本。

チルノは黙々と読んでいたので、そんな大妖精の様子になど気づくわけがない。

大妖精はその本を手に取り、おもむろにチルノの隣に座って読み始めた。

一ページ目がやっと読解出来た様子のチルノは、

となりに座って本を読んでいる大妖精の方をチラッと見た。

チルノは大妖精が読んでいる本の大きさに驚愕し、

石にされたかのように固まってしまった。

大妖精がチルノのそんな様子に気づき、諭した言葉を送ったのだ。

「いやいや、この本はそんなに難しくないので、驚く事ないよ」

大妖精の発言を疑ったチルノは、がばっと体を動かして、

大妖精が読んでいる本を覗き込んだ。

その内容は、チルノが読んでいる本の数倍難しいものであったので、チルノはその瞬間に雷鳴に撃たれたかのようなリアクションを取り、シクシクと部屋の隅っこでいじけてしまった。

大妖精が別に悪い事をしたわけではないのだが、

大妖精は申し訳ない気持ちになってしまい、チルノをなぐさめようとした。

「大丈夫だよ、チルノちゃんだって、賢くなれるんだから」

言い方が悪すぎる気がしたが、

今のチルノにはそういう事を理解する頭も詰まっていなかった様子である。

「本当？じゃあ、もっともっと頑張るよ！！」

立ち上がり、椅子に座ってまた本を読み出すチルノ。

その様子を眺めていたパチュリーは純粹に感心していた。大妖精に對して。

パチュリーは持ち前の探究心から、本人がいる前で尋ねてきた。

「あなた・・・・・・・・その妖精の扱いがうまいのね」

「付き合いが長いですからね」

その妖精「チルノというのは言うまでもない。

チルノはかなり集中モードに入っており、声も聞こえない様子である。

大妖精はその様子に安心し、分厚い本を静かに読み始めた。

パチュリーはパチュリーで、また本を読み続けるのであった――

夜も遅くなり、大妖精も読んでいた本が読み終わった頃になっても、

チルノは未だ四分の一も読んでいない様子である。

「チルノちゃん、もう夜も遅いし、帰ろうよ」

大妖精が呼びかけても、チルノはじつと本を読み続けている。

こんなに集中しているチルノを無下に扱うのも悪いと思い、

大妖精はそそくさと図書館を後にしようとしたが、

パチュリーがそんな大妖精の動きを止めた。言葉で。

「悪いんだけど、この子の見張りしてくれない？

あなたなら、何かあった時に安心できそうだからね」

「え？あの………もう夜も遅いですよ？」

「別にいいわよ、最悪ここで寝てても構わないわ」

パチュリーの気遣いに大妖精は感謝し、チルノの傍でチルノの様子を見守った。

パチュリーはその様子に微笑み、一旦図書館を後にした。

そのパチュリーの後ろ姿に、彼女の従者である小悪魔が心配そうな声をかけていた。

「よろしいのですか？あの者達が何かしかねないという保障はありませんよ？」

「それはもつともね

もしかしたら、本を読むのが目的じゃなくて、何かしら違う目的があるのかもしれないね」

しれっとそんな発言をしたので、小悪魔の不安は更に大きくなる。

「でしたら余計に警戒すべきなのは！？万が一があつてからでは遅すぎますよ！？」

小悪魔が声を荒げる一方で、パチュリーはあくまですましきつた様子である。

「こあ、あなたはわかってないわねえ、彼女達の本質を」

「本質？本質とは何ですか？」

「単純な事よ

妖精がそんな十重二十重に考えをめぐらせれるわけがないし、それに、二人ともびっくりするぐらい綺麗で真っ直ぐだもの
警戒するだけ無意味よ」

妖精メイド達を作り出した者としての発言に、小悪魔は黙ってうな

ずく他になかった。

その後で小悪魔は、己の失言を謝罪していた。

「失礼しました、私の考えが至らぬばかりに、余計な説明をさせてしまつて……」

「別にいいわよ、それに、まったく警戒していないわけじゃないわよ」

「え？」

「つまり、彼女達が余計な事をしようとした瞬間に作動する魔法を仕掛けてあるのよ」

まったくぬかりのない主人の余裕ある姿に、

小悪魔はただ感心するばかりであつた――

翌朝、ぐっすり寝ている大妖精の隣で、チルノは何と一睡もせずに本を読んでいた。

これがあのチルノなのか？と疑いすら向けれるほどに、じっと読み続けていた。

パチュリーはその姿に驚く事はしなかったが、昨日以上の感心を示していた。

そしてとうとう、チルノはその本の読解が終わった模様である。

「よっしゃー！！終わったあ……………」

その瞬間に、チルノは糸が切れたかのように机に突っ伏し、眠りに入ってしまった。

そして交代するかのように、大妖精が眠りから目を覚ましたのだ。

「ふわぁ、あれ？チルノちゃんまだ寝てるの？」

入れ替わるように起きたので、

大妖精の目にはチルノがまだ寝ているように見えるのが当然である。

大妖精がそつとチルノを起こそうとしたが、パチュリーがそれを制し、

首をふるふると横に振った。

その様子から大妖精は全てを察し、起こさないようにチルノをだっこして、

そのまま紅魔館を後にしていった

その日から、チルノはほぼ毎日紅魔館へと通いつめた。

パチュリーから進められた本をどんどん読んでいき、

チルノはどんどん知識を身に付けて行く。

大妖精はその隣で見守り続け、パチュリーはただ観察にいそしんでいく。

チルノらしくないけど、そんな日々が何日も続いていった。

そしてとうとう、その日が来たのである――

「やれやれ、これで何回目だよ、チルノ

しかも、なんでわざわざここで戦うんだ？別に湖でもよかっただろ？」

「へへ〜ん！！場所にこだわる理由もないでしょ！！？それに、今までのアタイと一緒にしないで欲しいわね！！魔理沙！！！」

魔理沙とチルノの決闘の場所は、なぜか紅魔館の図書館で行われていた。

「パチユリ〜、お前はそれでいいのかよ〜？」

「別にいいわよ」

ズバっと即答された魔理沙は、「仕方ないか」としびしび戦う事を承諾した。

チルノは自信に満ち溢れた顔をさせて、魔理沙と戦う構えを取る。

そして二人の勝負は、音のないゴングと共に始まった。

「先手必勝！！」

魔理沙が手始めとして、星型の弾幕をチルノに放っていく。

チルノはそれらを一つ一つ冷静に回避していく。

「距離は50、速度計算を開始……………回避可能」

ぶつぶつと何かをつぶやいてるチルノの様子に、魔理沙は悪寒を走らせる。

「気味が悪いなあ……………じゃあお次はこれだ!!」

次に魔理沙が放ったのは、レーザータイプの真っ直ぐな弾幕。

「回避不可能、防御行動に移行」

チルノは目の前に氷の盾を生成し、魔理沙の放ったレーザーを防ぎきった。

しかし魔理沙は即座に距離を詰めるかのように、箒にまたがって突撃を仕掛けてきた。

「くらいなあ!!」

「!?!」

氷の壁を破られたチルノは、そのまま魔理沙の筈による突撃を食らってしまった。

そしてその攻撃によって、チルノは跡形もなく砕け散ってしまったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

攻撃した本人が驚いてしまう展開。

パチュリーの傍で見守っていた大妖精が、あたふたとぱにくつていた。

「ああああ！！ち、ち、ち、チルノちゃんがあああああああ！！！！」

「落ち着きなさい」

あの程度の攻撃でやられる子じゃないでしょう？

ほら、砕けた破片を見なさいよ」

「へ？」

パチュリーがそう言うが早いか、砕け散った破片は魔理沙の周りを飛び交い、

意思を持ったかのように魔理沙へと襲い掛かっていた。

「なにい！？ちいい！！ぐあー！！」

不意の攻撃なので避けきれず、何発かほど魔理沙にそれらが直撃していく。

そして少しもしない内に、チルノは悠然と魔理沙の前に姿を現したのだ。

まるで冷気が集い、その形を成していくかのように、チルノは姿を見せてきた。

「ハッハッハ！！引つかかったわねえ魔理沙！！」

それはアタイが氷で作った弾幕の一種よ！！

そうとも知らずに攻撃するなんて、あんたバカね！！」

バカにバカと言われて、魔理沙はむかつ腹が立ってしまった様子である。

「んだとお！？舐めやがつてえ！！もう容赦しねえぜ！！」

魔理沙は早々にミニ八卦炉を構え、自身が持つ十八番を放ったのだ。

「行くぜ！！恋府！！マスタースパアアアアク！！」

虹色をさせた巨大なレーザーは、チルノを文字通り飲み込んでいった。

レーザーが照射し終わると、そこにはチルノの姿は跡形もなくなっていた。

「あ……やっべえ………ついやり過ぎたかな………
」

額に汗をたらし、最悪の答えを予想した魔理沙。

それをあざ笑うかのように、魔理沙の背後からチルノの高笑いがしてきた。

「はっはっはあ！！所詮はその程度なのね魔理沙あ！！
戦いで冷静さを欠いた方が負けるってのは相場が決まってるわよ
！！」

魔理沙が振り向いた先には、九人ほどになったチルノが悠然と魔理沙に構えていたのだ。

「ま、まさか・・・・・・・・・・さっきのも囃か!？」

「そのとおり!! あんたって本当バカねえ!! あんな手に二度も引かかるだなんて!!」

さーて、今度はアタイの番よお!!」

九人になったチルノは、統率が取れたかのように一斉に魔理沙へ氷の弾幕を放っていった。

「くっそお!! だがこの程度で私の・・・・・・・・な!？」

飛び交う弾幕を避けながら攻撃しようとしたが、

魔理沙の体は何かを取り付いたかのように、動きを止められてしまったのだ。

動きの止まったところに、チルノ達の弾幕が容赦なく飛んでくる。

「ぐあああ!!」

直撃し、そのまま床まで落下していく魔理沙。鈍い音を立て、床がささくれ立つ。

魔理沙がどうにか体を起こしたが、体は既に戦う事をよしとしない有様である。

「くそお……なんでもさっき……動けなくなっただ・
……」

魔理沙がかみ締めるように原因を探求していると、チルノが飄々と説明をしてきたのだ。

「それはね、あなたがすぐに気づかないレベルで、
ゆっくりとあなたの周りを冷やしておいたのよ」

「何……だと？」

「戦ってる時って、痛みとかの感覚が鈍くなっちゃうのよ、脳内麻
薬とかの関係でね」

アタイはそこに目を付けて、あんたの動きを止める手を考えたわけ
ほら、手がかじかんで動かす事も出来ないでしょ？」

チルノがそう語っている通り、

魔理沙の体には所々冷氣によって出来た氷の破片がこべりついてい
た。

吐く息は白く、指先は震えてろくに動かず、歯をがちがちと鳴らし
て身を震わせる。

凍えきった体は、文字通り戦いを放棄したと言っても過言ではない

有様であつた。

「どう？これがアタイの本当の実力よ

わざわざ図書館を戦いの場を選んだのも、

あんたが好き勝手に飛び回らないようにする為よ

この方法はアタイの霊力をかなり使うから、出来るだけ動きを制約させたかったのよ

そして、最初に攻撃させてたのは、あんたを疲れさす為よ」

チルノの言つた事は、ほぼ完全にその的を射ていた。

もはや戦う事が不可能に近い魔理沙に、チルノがほくそえんで言葉を吐いてきた。

「魔理沙、降参すれば痛い目にはあわないわよ？

もう戦い事なんて無理でしょ？おとなしく降参した方が身のためよだって、もうアタイの勝ちが決まってるんだからさあー！！

あっはっはっはっはっはっはあー！！！！！！」

圧倒的余裕を保っているチルノに対して、魔理沙はあくまで強気な目をさせていた。

その目は、まさに降参の「こ」の字もないほどの鋭く真っ直ぐな目つきであつた。

チルノはその目を見ても、あくまで余裕な調子である。

むしろ牙を折ったはずの獣がまだあきらめていない様子に、チルノはせせら笑っていた。

「何よ？まだやろうつての？もう勝負は見えてるじゃない
降参する気がないのなら、アタイがトドメを刺しちゃうよ？」

チルノの言葉に逆らうかのように、魔理沙はあくまで強気な目をさせている。

そして、魔理沙は己の体を奮い立たせて、折れていない証拠の言葉を告げてきた。

「あいにく、私はあきらめが悪いんだぜ・・・・・・・・・・
だから、この勝負だって、降参は絶対にしないぜええ！！」

魔理沙がそう吼えた瞬間に、自分の足元目掛けて自家製の魔法瓶を叩き付けた。

魔法瓶は青い焰を出して燃え上がり、魔理沙の体を燃やしていった。
その様子にチルノは、高笑いを超えて大声で笑い出した。

「まさか、降参するのが嫌だから自滅したの！？あんたって本当バカねえ！！」

あはははははははははは！！！！まあいいわ！！
これでアタイのか『私の勝ちだぜ、チルノ』……………は？」

チルノの自信に満ち溢れた宣告よりも、更に力と勢いのこもった魔理沙の言葉が、

チルノの勝利宣言を文字通り妨害した。

当然チルノにとってはあまりにも予想外の行動だったので戸惑ったが、

チルノは急いで冷静さを取り戻し、魔理沙の方を見た。

炎が消え、姿を現したのは――

己についた氷の破片を全て燃やしつくし、魔力を高めきった魔理沙の姿であった。

最初にそれを見た瞬間に、チルノは困惑するしかなかった。

次にチルノが魔理沙の周りを見渡すと、割れている魔法瓶が二本ある事に気がついた。

チルノは考えをめぐらし、ある答えにたどり着いたのだ。

その答えを、魔理沙は流暢に説明してきた。

「多分、今のお前だったら、私が何をしたのかよくわかるだろうな

そうだよ、私は二つの魔法瓶を使っただ

片方は炎を出す奴で、威力を調整して私の周りの温度を上げたかなり熱かったけど、寒いより100倍マシだぜえ!!

そして、二本目に割ったのは、霊力と魔力を高める奴だ

ここまで言ったら、私が何をするのか——わかるよな?」

魔理沙は余裕を持って、ミニ八卦炉を構えた。

そして、自身が持てる魔力の全てを、それに注ぎ込んでいった。

チルノは直感で感じ取った。その危険性を。

しかし、今のチルノは不幸にも、それを計算式からどうしようか考えてしまったのだ。

チルノが常人では理解できない計算式を立てているうちに、

魔理沙は最強のスペルの準備をすませてしまった。

もはやチルノに手立てなどない。

チルノは己の全てをとして、魔理沙の攻撃を待ち構えてしまった。

そしてそれこそが、最も愚かな選択肢であっただ。

「チルノお……………最後に一言言っておくぜえ……………」

「

魔理沙の辺りが激しく揺れていき、魔力が高められていく。

「いくら勝つ事を計算してもだなあ……
力の差を計算出来なかった時点でえ……」

その言葉と同時に、それはチルノに放たれていったのだ

魔理沙最強のスペルカード、魔砲『ファイナルスパーク』が放たれていく。

その威力、サイズ、破壊力、どれをとっても幻想郷指折りに入る究極のレーザー。

九人のチルノ達は、それを防いでどうにかしようとしたが、

所詮は洪水に飲まれていく木の葉たちに等しい。

レーザーはチルノ達を全て消し飛ばしていき、

図書館を覆う結界を破壊しかけたところで、その勢いをようやく殺した。

後に残ったのは、真っ黒に焼けたチルノと、疲れ切った魔理沙の姿であった。

ぶずぶずという音を奏でて、起き上がる気配を見せないチルノ。

魔理沙はミニ八卦炉をしまい、「ざまあみろ」とつぶやいた後で、

ドサツと前のめりに倒れてしまった。

こんな状況下では、勝者は誰なのかと言われたら、

ジャッジできるのは傍観していたパチュリーと大妖精の二人。

そして、二人のジャッジが下した結果はこうである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・とりあえず・・・・・・・・・・」

「引き分けでいいわね」

大妖精はチルノを担ぎ、パチュリーが魔理沙を担いで、各々が手当てを出来る場所に行き、

二人の手当てをしていたのであった――

その後のチルノは勉強を止めて、どこかの山で修行でもしているらしい。

大妖精はやっぱりその傍で、チルノを見守り続けていたのであった

（後書き）

後書き

やりたかっただけ。

どこから適当にもらったインスピレーションを、更に適当にしただけ。

元ネタはもっとシリアスだけど、長引きそうだからシリアス放り投げた。

その結果がこの短編さ。実際チルノは強いと思うのです。

ま、連載の方があるので、後書きはこれぐらいでいいでしょう。

スペシャルサンクス

チルノ 様

大妖精 様

霧雨 魔理沙 様

パチュリー・ノーレッジ 様

小悪魔 様

たはは、とりあえずこんな適当な駄文にお付き合いしてください
皆様

本当にありがとうございます！！

んではまたあゝ（＊＾―＾＊）ノシ

PS、アドベントチルノの小説書いてみたいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5510p/>

アタイはバカじゃないもん！

2010年12月18日15時33分発行